

文協甲府



目次

- 発行のことば 会長 樋口 雄一 …… 2
- 甲府市教育委員会 教育長 松田 昌樹 … 3
- 筆頭副会長 …… 3
- 副会長 …… 4
- 専門部から …… 5～10
- 地区文協から …… 11～18
- 第49回 甲府市民文化祭 …… 19～38
 - ・特別出品 …… 20
- 文化祭賞・奨励賞 …… 21～26
- 展示・発表の部 …… 27～36
- 開幕式・私の地域 歴史探訪・表彰式 …… 37
- 事務局から …… 38～39
 - ・令和5年度定期総会 …… 38
 - ・文化講演会 …… 39
- 甲府市文化協会 顧問・役員氏名 …… 40
- あとがき …… 40

甲府市文化協会

会長 樋口 雄一



私は今年一年の思いを表す漢字を「進（シン）」といたしました。「進（シン）」には、すすむ、向上する、下から上にいく、のぼるという意味があります。

コロナ禍を経て、地域の諸行事や経済活動が活発に動き出し、市民の皆様にも笑顔が戻って来ていることを実感するとともに、コロナ後の新しい生活様式や働き方による、新たな時代へと前を向いて進んでいく必要があります。

こうしたことから、今年は、この流れをさらに力強くさせるため、前に進むための次なる行動、「KOFU NEXT ACTION」に掲げた各種施策を着実に実行・実現していく中で、本市の限らない発展に向けて、去年より今年、昨日より今日というように、今よりさらに上を目指して、私自身が先頭に立ち、皆さんとともに立ち止まることなく進んでいくという決意を込めて、「進（シン）」という漢字を選びました。

発行のことば

うららかな日差しに、春の到来の喜びを感じる季節となりました。

平素より、甲府市文化協会の役員各位をはじめ、会員の皆様方におかれましては、本協会の円滑な運営並びに本市の文化振興に多大なご尽力をいただき、改めて深い敬意と感謝の意を表する次第であります。

昨年は、五月に新型コロナウイルスが五類に移行し、様々な制限で思うように活動できない日々から、ポストコロナの新たな日常に移り変わる中、各地区では、文化祭をはじめ、運動会やお祭りなど、地域行事が再開され、本来の地域活動が広がりを見せた一年でありました。

こうした中、昨秋開催した市民文化祭では、会員の皆様の口頃の研鑽の成果となる作品展示や発表を通じて、多くの皆様に、文化芸術の魅力を満喫いただくとともに、今回新たに企画いたしました「次世代発表・高校生の部」では、若い躍動感ある発表を披露していただき、文化が未来に繋がる希望を与えるものとなっ

たと感じております。

そして、この度、会員の皆様から寄せられました、一年間の文化芸術活動等をまとめた機関誌「文協甲府第45号」を発行する運びとなりました。

これからの文化活動を推進していくうえで、活用いただくとともに、これまで活動を自粛していた皆様にも手に取っていただき、活発な文化活動を再開してもらえれば幸いです。

今後におきましても、文化芸術活動を通じて、市民間交流を深め、本市の重層的で多様な歴史や伝統、文化を次世代に引き継いでいけるよう、鋭意取り組んでまいりますので、引き続き、皆様方のお力添えを賜りますようお願いいたします。

結びに、本市文化芸術の更なる発展を願いますとともに、会員の皆様、益々のご健勝とご活躍を祈念申し上げます。

「文協甲府」発刊に寄せて



甲府市教育委員会

教育長 松田昌樹

明るい陽ざしが気持ちよく、甲府盆地にも春の訪れを感じられる季節となりました。

甲府市文化協会並びに関係各位の皆様におかれましては、日頃から本市の文化芸術振興にご尽力をいただき、誠にありがとうございました。

令和五年度につきましては、いよいよアフターコロナのフェーズを迎え、コロナ禍に皆様が温め続けてこられた文化の輪が、より一層の広がりを見せる中で、文化祭をはじめとする催しも、皆様の創意工夫のもとで開催されました。

特に、文化の日より開催されました第四十九回甲府市民文化祭は、「培った 文化の光 輝け未来に」をテーマに、展示九部門、発表十一部門において、心を込めて制作された展示作品や熱意が集結された舞台発表が甲府の文化を大きく輝かせ、私たちにも多くの感動を与えてくれるものとなりました。

本市教育委員会では、皆様が

弛まざる努力で文化芸術活動に取り組んでこられたことにつきまして、称賛を贈るとともに、文化協会に加盟されている諸団体の皆様や会員各位に対し、衷心より敬意と感謝を申し上げる次第でございます。

昨年の夏は例年にも増して非常に暑い日が続きました。文化芸術活動に取り組まれてきた皆様の努力と汗の結晶は、次第に深まりゆく秋の気配の中で結実し、その集大成としてこの度、皆様の一年間の文化芸術活動をまとめられた「文協甲府」が発刊されますことは、誠に意義深く喜ばしいことであります。これからも皆様の文化芸術を愛する心を後世へ伝えていただき、多くの方々にご高覧いただけるものとなりますよう祈念しております。

結びに、本冊子の制作にあたり、ご苦労いただきました編集委員の皆様にご敬意と感謝を申し上げ、発刊に寄せるあいさつといたします。

筆頭副会長に就任して



筆頭副会長 矢崎吼隆

コロナに苦しめられた長い期間が過ぎ、ようやく元通りの活動ができるようになりました。

コロナ禍という災いの中も会員の皆様は文化活動に対する熱意を失わず、第四十九回の市民文化祭を立派に成し遂げることができました。

ここ数年の間に会員が減少し、また諸物価の高騰により文化協会の財政が苦しくなっております。理事会においてこの問題についてご協議をいただき経費の効率の支出を図るために、予算支出の見直しを行いました。その一つとして機関誌「文協甲府」と市民文化祭の成果を著す「文芸こつふ」について、見直しを行いました。

「文協甲府」と「文芸こつふ」の内容を整理し「文協甲府」は機関誌として内容を更に充実編集し、「文芸こつふ」は文学部が発行し、文芸作品を主体に編集し発刊することといたしました。「文芸こつふ」につきましては文学部の皆様のご理解とご協力をいただき成果を挙げることであります。

文化協会の活性化のためには、会員数を増やすことを考えなければなりません。将来のためには、若い人たちが今より更によく文化協会に参加していただくことが重要なことだと思います。

昨年の文化祭では高校生の参加部門を作り実施しましたが、大変好評をいただきました。若い人たちに文化協会の活動を理解していただく機会になることを考え企画いたしました。が、こうした試みを実施し模索していくことは大切なことであり、努力を重ね何らかの明るい方向を見いださなければなりませんと思っております。

さて、私は令和五年五月二十五日の文化協会定期総会におきまして、樋口雄一会長からご指名をいただき筆頭副会長に就任いたしました。

鶴田一杏前筆頭副会長は、平成九年から二十六年間筆頭を務められ大きな功績を残されました。私はそのご功績を尊重し、与えられた役割を果たす努力をして参ります。皆様のご指導とご協力をお願い申し上げます。

コロナ禍を終えての文化芸術活動の在り方



副会長 中澤 緑

コロナ禍により人々の様々な価値観が一変した。特に他人との接触を避けるための技術導入は多くの業界で浸透し、コロナ禍の収束を迎えつつある現在、それが世間の当たり前になるうとしている。

便利な世の中になった反面、本来、人と人が出会うことによって生まれる相手を尊重する心、コミュニケーション力、想像力等いわゆる「人間力」に携わる機会が減少した気がする。我々の先祖を含め長年培ってきた確かな「人間力」。そしてその大切な心を表現することのできる一つが「文化芸術」であると考ええる。

これはどんなに様々な技術が進歩しても決して代替えできない不変のものだと私は思う。昔から常に多様性を維持しながら人々の身近に存在し、他者と共感し合う心を通じ人間相互の理解を促進し尊重す

る「文化芸術」。人々の心の豊かさや交流を生み出し、活力ある社会を構築する貴重な資産でもある。

多くの苦勞を乗り越え、ようやく活動を再開することはできたものの、コロナ禍と高齢化により、私たち甲府市文化協会もここ数年は会員数の減少が進んでいる。様々な思いもあるとは思いますが、元会員の方々は、今まで長きに渡り追い求めてきた理想と活動を見つめ直し、もう一度私たちと一緒に「文化芸術」を通じてこの大切な伝統文化の継承と次世代へ繋ぐべく若手育成に励んでいただき、世代を超え協同し、より良い未来を一緒に築いていけたらと思う。



変革に向けての議論の活発化



副会長 松澤 榮二

今年度、最も大きな事業である市民文化祭が、多くの関係者の皆様のご支援とご協力により盛況に開催することができ、改めて感謝を申し上げます。

二〇一九年から始まったコロナ感染拡大パンデミックとも言われた世界的流行期から四年目にして第五類に移行され、活気が戻りコロナ禍前の「日常」が戻りつつある中で、文化・芸術活動も一変し、活発に活動する喜びを得てきたところです。

第四十九回市民文化祭もコロナ禍前の運営での開催ができたことは大変うれしく、皆さんも何か自信に満ちた顔に映ったのは私だけでは無かったことでしょう。

さて、地区文化協会も会員の高齢化にコロナ感染拡大防止に伴う活動制限が追い打ちとなり、会員の退会、そして部の廃止にとつながり、かつての活気が失われる現状にあります。各

地区役員の方々も懸命に取り組んでおりますが、こうした状況は文化・芸術の弱体化にもつながり、今後の文化活動を進めるにあたり大きな課題となり、これからの文化活動に変革が求められています。

甲府市文化協会も令和八年度には、創立五十周年を迎えようとしています。

文化協会もこの節目に合わせ、市・地区における文化・芸術活動はどうあるべきか、財政も含めた変革が必要と思われる。

変革を進めるにあたっては、市民憲章にもある「教養を高め、文化のまちをつくります。」は、私たちが生きていく上で、必要不可欠なものであり一層魅力ある文化・芸術活動に向けて、次世代の方々との交流を深め、地区文化協会と一体となり、議論を深め作り上げていければと思います。

専門部から

イングリッシュハンドベル への出会い

合奏部

内田陽子

私たちは、二〇〇六年、合唱を通して奉仕する団体「アンサンブルリベカ」という名でスタートしました。二〇一九年には、ハンドベルを指導されていた深沢先生と梅木さんとの出会いから、合唱とハンドベルの慰問活動が始まりました。

その後、コロナウィルスの感染により合唱ができず、さびしい思いをしているところに、私たちの心を癒してくれたのがハンドベルでした。ハンドベルを演奏するには、準備、演奏、片付けまでチームの連携が重要です。ましてや演奏となると一音一音のつながりが大切で、一人一人が大きな存在です。



梅木さんの基本練習でも、技術の他に音の流れと心のつながりをふまえた指導をしてくださいます。

曲が完成し、音色の美しさを感じる事ができた時は、達成感と満足感を得ることができません。その時には、私たちに笑顔が生まれます。

今年度は、美術館のロビーコンサート、合奏部での発表、施設、保育園等の慰問と活動の場が広がりました。

一回一回の場、出会いを大切に、ハンドベルの美しい音色が届けられるよう励んでいきたいと思えます。

希望の星

吟剣詩舞道部

山縣清博

コロナ禍も落ちつきつつあり、日々の活動は詩吟に剣舞・詩舞にと努力を重ねています。日頃は各流派派会員の交流がとぼしく、顔を合わせるの文化祭・吟剣詩舞道大会の当日くらいしかありません。会員からの提案で、発表会以外で同じ時間を過ごしたいと、研修会をすることにになり実行委員会をたちあげ第一回が行われました。会員たちの感想は、「リラックスした楽しい雰囲気のおかげで、猛暑での練習会やコロナで疲れた気持ちすが、すっきりして活動への意欲が増した。」と笑顔でした。今年度の甲府市民文化祭に初めて高校生が参加があり、ダンス・合唱・吹奏楽

などの発表がありました。高等学校に吟剣詩舞道部がおかれ、部活動のなかで古典芸能を学び、発表会に参加してほしいと思えます。そしてこの活動が甲府から山梨県全地域に広がってくれることを願っています。若い力は甲府のそして日本の希望の星です。



文化と共に

茶道部

稲葉和仙

現代に生きる私たちは、文化を享受するということにとっても恵まれていると思えます。

今年の第七十五回正倉院展では、聖武天皇ご愛用の美しい品々と共に、宮人を支えた民たちの生活が垣間見えるような古文書の展示もありました。



その中で、税制として甲斐の国から大津の石山寺での写経にかり出されたものの、辛くて逃亡、代わりに行った親族も又逃亡、というような記述が印象に残りました。思うに、このような環境では民たちが文化に触れることも少なかったことでしょう。

そんな時代を経て私たちは今、当時の宮人たちが育み繋いでくれた日本文化を受け取ることができています。コロナ禍での制限も緩和され、自由に文化に触れることができます。

もしかしたら、そんな贅沢な環境に甘えていないでしょうか？今の時代に生きていることに感謝して、より多くの文化をじっくり味わおうではありませんか。

「能」について思う

能楽部

佐藤 眞弓

十一月四日、山梨県立大学の学園祭で、国際政

策学部の高野先生が、「能『鶉飼』」を学びその価値を日英二ヶ国語で発信できれば、国際コミュニケーションを学ぶゼミ学生にとって意義深いものとなり、伝統文化を知ることが、自己のアイデンティティについて考える機会になる」ということで、講演会を催されました。宝生流のプロ能楽師の和久先生の講演の後、石和の鶉飼山遠妙寺を訪ね、住職の講話を聞き、和久先生の堂々とした奉誦の後、帰校しました。

ここで四十年程前に遡れば、高校生向けの学校行事として、県民文化ホールで、能『隅田川』が演じられました。観能後のロビーに満ちた高校生達の高揚した空気が思い出されます。

先日の文化祭の発表の後、聞いていたという方に「能

楽は格式が高く、敷居が高い」と言われました。「ちよつと違います。もっと身近にあり、ゆつくり楽しめるものです」とお伝えできたらと思っています。



第四十九回甲府市民文化祭を終えて

舞踊部

保坂 とみ子

十一月十九日(日)秋の暖かな陽射しの中、舞踊部の発表を午後一時三十分より芸術ホールにおいて開催いたしました。

令和五年度、新規加入した

二つの会を含め、十三会派となったことは舞踊部にとって大変うれしいことでした。甲府市民文化祭も昭和・平成・令和と引き継がれ、出演者の中には高齢になった方もおられますが、はつらつとして踊っている姿や、また子どもたちの元気に踊っている姿に、これからも続けていきたいと願っております。

今年度の文化祭は、舞踊部・地区文化協会・一般参加により、一二〇名が二十五曲を発表し、練習の成果を披露いたしました。まだコロナ禍やインフルエンザなどの感染を心配しておりましたが、無事に終わることができたことに感謝



しております。

これからも今まで培った文化を継承していくよう、舞踊部一同精進して参りたいと思います。

第四十九回市民文化祭を終えて

邦楽部

岡 安 喜和広

今年の文化祭は好天に恵まれ、様々のイベントが近年の雌伏期から目覚めた如く、活々と多方面で催されました。

我々邦楽部も、参加社中が例年より少なかったのは少し残念でしたが、個々の技量はかなり向上し、内容は充実していたと感じました。例年になく猛暑にめげず、たゆまぬ練習を続けられた成果と思います。

特に若い人たちが腕を上げられ、参加者も多くなつたこと、誠にうれしいことと思います。

邦楽に親しむ若人が増えること、将来が楽しみです。



民謡のいっしん

民謡部

小松 芙子

猛暑から秋を飛び越えて既に冬ですね。

十一月十二日は会員の皆様ご苦労様でした。また日頃お世話様です。

私は民謡を始めたのが三十五歳、私の所属している同好会も当時は七十名からの会員がおり、また他の会も多数ありました。発表も一日がかり、会場も満席でしたね。

現在はお客様も会員も少なく淋しいです。退部する方がいても入会者がいない。

山梨の民謡には、良い唄が沢山あります。歌い継いでいただきたいのですが難しいこの頃です。若い方々に入会していただくにはどうしたら良いか、民謡の魅力を伝えるにはどうすれば、と思考していますが、良い案がありません。大きな声で唄い仲間と楽しいおしゃべり、健康にも若さを保つにも最高です。皆様民謡に入会よろしくお願いたします。

私は生まれが山形県です。子供の頃父親が酔うと必ず唄っていた「朧摺り唄」を聞いて育ちました。だからですか、民謡大好きです。



子どもたちの未来に

洋舞部

深沢 由美

長いながい闇の中から、少しずつ光の射す方へ向かって歩み始めた今年、子どもたちの表情を見て、この三年間の日々が心がずっしりと閉ざされていたのだと感じました。バレエの感情表現に肝心な目の表情がないのです。どうしたら子どもたちの目に輝きを取り戻すことができるのか。マスクを取れば表情が戻ってくるのか？感情を動かす術がないと。

悩み続ける中、クリスマスシーズンに外国でよく上演される「くるみ割り人形」全幕を行う機会に恵まれました。各スタジオ合同での全幕物は本当に大変です。でも、生徒たちは、ネズミ、兵隊、パーティーの子どもたちなどの役になりきり、少しずつ素敵な表情を見せてきました。コレです！やはり大人たちが環境をつくってあげれば、子ども

もたちの目にちゃんと生氣が戻ってくるのです。環境を整える裏方は大変ですが、子どもたちに夢と共に未来に進んでいく気持ちを持たせてあげたい、そんな想いでいっぱいです。



見学研修旅行に参加して

華道部

小林 明美

甲府市文化協会華道部の大切なイベントのひとつが見学研修旅行です。コロナ禍で開催を見合わせていましたが、昨年度より参加人

数を縮小し、開催することとなりました。一月ごろから候補地が上げられ、旅行会社と打合せをし、行程表ができあがりです。一番の目的は、お花を通して文化活動をしているみなさんと一緒に、新しい興味や驚きに出会い学びたいということ、そして美味しいお昼をいただき交流を深めたいということでした。

今年は、新緑の眩しい六月下旬、箱根の岡田美術館に行ってきました。まず入口の巨大な(十二×三十メートル)風神雷神の大壁画に驚き、館内に入ると、一階から五階まで数々の見応えのある収蔵品が展示されていました。溜息がでるような美しさの器、その当時の情景を描きだしている絵画、いつまでも眺めていたい空間でした。開館十周年記念の「歌麿と北斎」展が開催されていて、浮世絵の世界に浸ってきました。日本のすばらしい文化をあらためて知るとても良い機会となりました。

甲府市文化協会この十年

工芸部

石川 顕

ここ数年、甲府市文化協会は大きな変化と進化を遂げてきた。

文化祭の展示部門は出展者数が増え続け、五年前と比べると約二倍の作品数になっている。展示スペースが不足しその確保が課題となるほどである。

各部門の所属団体数も増加傾向にある。毎年十団体を超える加盟申請が出されているようだ。

一時は文化協会の高齢化



撮影記

写真部

藤井 もとみ

が懸念されていたが、若い人たちの関心が高まり、学校の部活動やサークル活動での取り組みを、卒業後は文化協会に場所を移して活動する人たちが多数見られるようになり、世代を超えた作品作りを通しての交流も盛んに行われている。

市民への広報活動も功を奏し、これまで「甲府市文化協会って何？」という声が多かったが、今ではほとんどの市民が文化協会の意義や活動を理解している。

文化協会の組織、役員も、老若男女バランスよく構成されるようになって、多様な意見が活発に議論され、活気のある運営が行われている。

十年後の文協甲府にはこんな文を書きたいものである。



令和五年度文化祭、今回は近場の撮影が多くなっています。獲物を捜している

ように頭をめぐらして、春が来て足もとの雑草も綺麗な緑、上を見れば新緑の木々、花が咲き始め、よしと勝沼のフラワー公園に、そして温室の中へ。中では職人の人達が丁寧に手入れをしていて、あちこち周りに撮影、隣りのバラ園へ。バラ園は入口がアーチで抜けると通りの扉もバラと春いっぱい、これぞとシャッターが動きました。夏は水辺の写真が好きでよく出掛けるのが信玄堤、西側は釜無川の大きい川が流れていて、東側は小川が浅くゆるやかに流れ、その川淵にそって太いケヤキと桜の木々などが並んでいて、春は逆光で新緑の木立と小川が輝き、秋は木々の緑が紅葉の一色

になり逆光で輝いている。私の写欲をそその好きな場所です。

今後も私は、好きな写真を楽しむ幸せを味わいながら作画をしていきたいと思っています。



いろいろな書

書道部

矢崎 美咲

暖かな十一月三、四、五日、第四十九回甲府市民文化祭・展示部門が開催されました。書道部では専門部六団体七十九点、地区文化協会八団体五十九点、合計一三九点の作品が集まりました。昨年よ

り作品が少し増え、またスペースも広くいただいたので、ゆったり展示できました。今年は名票展示を工夫して、壁を汚さないテープを使用したので落ち着き安心できました。

作品は漢字、かな、調和体、篆刻、刻字と多方面の分野があり、豊かさがありません。大きさは半切二分の一以内ですので、作成も書きやすいかと思っています。

また一年かけて、書く文字をさがしたり、どんな大きさにするのか、表具はどうしようか、筆はどれを使おうかと楽しみみたいと思います。書を書いてみたい方はどうぞお声をおかけください。



最後に、多くの方が甲府市民文化祭に遊びに来られるよう、出品者はもちろん、回覧板、報道関係等でお知らせできると思います。

水石の歴史と伝承石について

水石部

水上 強

水石（山水景情石の略です）は、鎌倉・室町時代にはじまり、江戸時代に入り、文人墨客に多く愛好され、明治になると豪商に愛好されるようになりました。

水石展示の様式が定着したのは、明治中期以後のことです。昭和三十年〜四十五年代は大変な「石ブーム」でしたが、その後、本来の姿にもどり現在に至っています。

伝承石には、由来石・遺愛石・奉納石等多くの石が全国に残されています。

後醍醐天皇が隠の島に流されたとき、懐（フトコロ）に入れていった一つの石「夢

の浮島」は、徳川美術館に
伝承され、これが伝承石の
最初とされています。

以後、信長の伝承石「末
の松山」は、石山本願寺の
寺宝として。

伊達政宗の遺愛石「黒髪
山」は、伊達家の重宝として、
伝承されています。

江戸時代の文人墨客を代
表する頼山陽の遺愛石や、
明治の豪商、岩崎弥太郎の
遺愛石等は、現在も子孫に
より水石展に特別出品され
ることがあります。

本県では、恵林寺に夢窓
疎石（国師）の伝承石「山
形石」が寺宝としてありま
す。



文化祭の感想

美術部

古川 みや子

開幕式のセレモニーの名
曲は感動いたしました。初
日は茶会の催しもあり、着
物姿の人たちも多く会場が
華やぎ、盛り上がり色を
添えていただきました。開
催された三日間は天候にも
恵まれ暖かかったので、来
観者の足取りも軽く感じま
した。

美術部門の飾り付けは、
各会全員で協力し短時間で
終了することができました。
展示もゆったりと間隔をと
り鑑賞しやすかったように
思いました。今回はレベル
の高い作品が多いように感
じられました。文化祭賞の
作品は構図もしっかり描か
れ、色調も落ち着いていて、
すばらしい作品でした。
高齢化とともに、参加者
が少なくなりつつあります。
来場者も少なく感じられま
した。次回に向けて何らか
の方法で一般の方々が会場
に足を運んでいただければ

うに、考えなくてはならな
いと痛感いたしました。
美術部の皆様ご協力あり
がとございました。



俳句を始めてみませんか

文学部

河野 一郎

俳句を始めて三十五年が
経つ。初めて作った俳句は
小学校高学年の時の「雪の
朝チェーンのひかり町を行
く」である。チェーンを付
けた通勤の車が雪をけ散ら
しながら忙しく行き来する
情景を詠んだ。

その後何年も俳句を作る
ことはなかったが、平成元

年になって本腰を入れて取
り組み始めた。その背景には、
父が若い頃から会社の句会
で飯田龍太先生のご指導の
下、俳句を続けていたこと、
また山日の文芸欄に投句し
ていたことがある。私も父に
触発され廣瀬直人先生の欄
に投句を始めた。四か月経っ
ても新聞に載る気配は全く
なく、もう止めてしまおうと
思っていた矢先、五月からほ
つぽつと載り始め、載ると次
の掲載が楽しみとなり六年
間ほど継続することができ
た。山日への投句は今日まで
の句作りの原動力となった
と言える。

俳句を始めるきっかけは
何でもよい。例えば今人気
のテレビ番組「プレート」
に出演している夏井いつき
先生の厳しくも温かい添削
で原句が見事な句に変身す
るのを見て、感動して始め
るのもいいでしょう。俳句
に興味・関心のある方、今
日から始めてみませんか。
市内の様々な場所で行われ
ている句会はおなたを待っ
ています。



アケボノヒナスミレの紹介

盆栽部

今井 千代子

八年前の二〇一五年（平成
二十七年）四月十八日に山梨
スミレの会の四名は、すみれ
の花探しに近くの林道へ出
かけました。道端に沢山の花
を咲かせているこのすみれ
に出会い、美しい形態に会員
は見惚れてカメラのシャッ
ターを押すばかりでした。そ
の場を離れる頃になって、よ
うやくこのすみれは交配種
で親は誰かしらと会員達は
思いました。まず近くに咲い

朗読は楽しからずや……

演劇部

古屋 昭子

ているすみれたちを調べました。アケボノスミレとヒナスミレが見つかりましたので、この両者の交配種という項目をあらゆる文献で調べましたが見つかりませんでした。植物学者の牧野先生ではありませんが、このすみれは交配種の新種かもと、その時思いました。

私たちは、このすみれがアケボノスミレとヒナスミレの交配種であることを出来るだけ調べて、すみれ連絡会の会報「すみれニュース」に新種として発見したことを載せました。

これからも、この様に新種のすみれを見つけていきたいです。



朗読の勉強をはじめてもう三十年近くになります。病気がちだった義母を送ってから、以前から興味のあった朗読教室に通い始めて、気がついたら三十年近くになつていました。

今は月一度の勉強会ですが、同じ趣味を持つ仲間と月一度顔を合わせることも楽しみのひとつになっています。

年令を重ね、体力や能力も年々衰えを感じますが、朗読により声を出すこと、音読をすることで脳の活性化が期待できます。

毎日読む新聞も声を出して読んでみる。またよく歌を歌うことも、息を深く吸って声を出すことで腹式呼吸になり、自律神経のバランスを整えてくれます。

今は仕事から解放され時間たっぷりありますが、それでも日は一日一日と過ぎていきます。でも朗読が

あることで本を手にするのが多く、活字を追い内容を読み取り、そして声を出して表現する、これこそ私のこれからの人生で、できるだけ長く続けていきたい目標のひとつです。

皆さんも朗読を始めてみませんか。わいわい、がやがや——賑やかなひと時を一緒にしましょう。



甲府市民文化祭に

初めて参加して

合唱部

櫻井 寿美子

歴史ある甲府市民文化祭に私達ゴスペルF・C・C

ペアーレの名前を刻めたことは、大いに今後の活動の励みになります。今年七月には甲府市民文化祭参加希望者を募ったところ、一瞬でメンバー全員が参加希望するという前途洋々の船出となりました。

それからというもの、ゴスペルの発表が初めてのことで、マイクや音源CD使用、施設の利用法等、部長、役員の方、音響ご担当の方には、私からの質問攻めの日々となりました。それにもかかわらず優しく丁寧に対応していただき、数々のご配慮をいただきました。お陰様で安心してステージに立つことができ、ステップを踏みながら全身で歌うゴスペルの醍醐味をいつも以上に表現できました。そして、今迄聴く機会の少なかったゴスペル以外のジャンルの合唱に触れて、同じ合唱をこよなく愛する者として大変勉強になり同時に癒されました。

合唱祭の余韻に浸りつつ、石川照子先生ご指導の下、

来年の文化祭に向けて新たな挑戦が始まります。



地区文化協から

令和五年度

琢美地区文化協会

琢美地区

深澤 芳次

平成二十七年、文化協会の会員でなく、部長でもない私が地域からの依頼によって副会長兼事務局になって六年間、事務局を務めました。そして、令和三年度総会において会長になりました。今更に思うことですが、会長職とはつくづく大変な職務でありました。事業は上手くいって当たり前、思いだけで進めると予想もしないところから苦言をいただくなど、相手を信頼していただけに、ただ驚かされることもありました。

しかし、これが地域社会の結末なのかと飲み込んで対処するしか道はないのが

現状です。理想をもって地域文化の変貌を描きましたが、私には成し遂げられませんでした。時として第三者の声も必要ですが、組織の中の者でないと、分らない苦労も多々あります。そして、いつも私を勇気づけてくれたのも、活動を支えてくださった諸先輩でした。

私は、地域に起きる文化活動の盛り上がりを期待しています。文化とは、古来の民衆によって作られたもの、その時代に合わせて変化するものもあり、そこから新しい文化が誕生するのではないのでしょうか！

地区文化祭を終えて

千代田地区

末木 幸造

千代田地区文化祭は、新型コロナウイルス感染症拡大の波を受け、感染防止のため、令和二年、三年、四年と文化祭の中止をよぎなくされました。

今年度は、千代田小学校と共催で十一月四日、土曜日、四年ぶりに小学校の体育館において多くの皆様のご参加と千代田小学校、同校PTA、千代田地区各自治会、各会役員様のご支援助ご協力の下、無事開催することができました。

小学校の部では「チヨダオータムフェスタ」とし、児童による一分間スピーチの会が催され、学年ごとに日頃の学習体験・活動・趣味等を発表し、意見・感想の質問時間を設け、地域の方々に、千代田小学校の様子をより一層理解していただくことができ、新型コロナウイルスにも負けない良い機会を得たと思います。

地区文化協会の部では、展示部門だけの開催となりましたが地域の皆様に作品を募ったところ、絵画、盆

裁、書道、写真、手芸、貴石原石、陶芸など、数多くの作品が集まり予想以上の展示会場となりました。

文化活動は、生活に潤いと安らぎを与え、人と人との交流を深めるきっかけとなり、地域社会の連携を強めます。今年創立百五十周年を迎える伝統ある千代田小学校の参加も、地域の絆をより一層深めたと思います。

今後の地区文化活動については、少子高齢化が進み活動が難しくなるなどの課題がありますが、地域の皆様とのコミュニケーションの場とし、地域社会の連携を強めていただけたらと思います。

地区文化協会の活動に思う

里垣地区

福田 勝子

私たち、里垣地区文化協会は、昭和五十四年十一月二十五日に発会し、約半世紀を迎えようとしておりま

す。当時は自治会が中心になり、会員も多く内容も多岐にわたり、物の豊かさより心の豊かさを求め、文化的な行事が盛んに行われていました。なかでも甲府大好きまつりは代表的なものでした。各部の練習で公民館の部屋を予約するのも大変な程でした。

現在会員の方々もお年を召され、どの部も休会する会員が多くなってきました。コロナ禍以降、特に増えた様に感じます。しかしながら、各種団体は小学校、中学校、高校と交流をしております。今後交流が更に活発にできる様になると信じております。市の文化祭での高校生の出演は素晴らしいかったです。この様な催しを、今後も続けていただきたいと思っております。

収穫祭

貢川地区

高田 宣雄

私の住んでいる富竹西部

自治会では、三年程前から町内の農家さんから、休耕地を借り受け、子どもから大人まで全員で作物作りをしています。

一年目がジャガイモ、二年目がダイコン、今年三年目もダイコンを植えました。近隣の方々が元々農家さん

千塚地区文化協会郷土研究部の活動について

千塚地区

小笠原 正人

です。教わりながらの作業で一年目のジャガイモは全三十四の世帯に十分行き渡り、二年目のダイコンも十分な程の収穫でした。子どもたちも目を輝かせ収穫をしました。コロナのため全員多くの人々で作業することができない中、大変良いレクリエーションになりました。この休耕地も、いずれは、家が立ち並ぶことでしょう。

人口が増え、近年特に子どもたちの人数が倍位に増加しました。登下校の見守りも増々やりがいが出てまいりました。これからも皆さんと農園いじりで、「ミニ二ヶーションを取ってまいります。

そして、文化祭に限らず、

新しい地域文化にも取り組んでまいります。

私たちの住んでいる千塚には、歴史的、文化的遺産（史跡）がたくさんあります。

最近私たちの先輩が地域の歴史をまとめた著書「千塚・湯村温泉の歴史」が刊され、我々の地域が文化的、歴史的価値のあることが分かりました。

今年度は、郷土研究部として歴史探訪、勉強会、講演会の三つの活動を中心に年間計画を立て実施してまいりました。

第一回は、六月中旬に「富士川舟運・繁栄の歴史」というテーマで、林陽一郎先生に講演をしていただきました。

第二回は、十一月の中旬に文化祭の一環として「武

田家ゆかりの寺・甲府五山巡り」として東光寺、能成寺、長禅寺、法泉寺の四つの寺を見学してまいりました。

講師として山本公和先生に解説をいただき、信仰心が強かった武田信玄公は、甲府にある臨済宗の寺の中でも由緒ある格式の高い寺、五つを選び甲府五山として保護してきたことがよく理解できました。大変有意義な五山巡りでした。

なお、今年度の文化祭は、四年ぶりに二日間にわたって盛大に開催することができました。

待ちに待った開催

相川地区

川崎 靖

十月の第二日曜日。

記念すべき第四十回相川地区文化祭が四年ぶりに行われた。昨年も行う予定で準備をしていたが、夏に来た第七波のために起こった慎重論が多数を占めてし

まい、苦渋の決断で中止となってしまった。今年度は新型コロナウイルス感染症が五月に二類相当から五類に移行したため、満場一致で開催となった。

しかし、四年のブランクのためか思ったように出演者が集まらない。しかも小学校の合唱部がコロナの中で活動休止のため出演辞退、続く中学校のブラスバンド部門も出演辞退となり、集客を期待されていた演目が相次いで辞退となってしまった。

出演者はいつもより少なくなってしまうが、それでもなんとか開催にこぎつけた。

四年のブランクは役員も一緒に、文化祭を経験していない役員が大半のところだが、以前の資料とらめっこしながらよく頑張った。演目も作品も進行もどれも一様に皆素晴らしく、記念すべき第四十回を締めくくれた。

みなさん本当にお疲れ様でした。



文化とはふぐちりである

東地区

清水 一成

坂口安吾という作家がこう言った。「昔、ふぐがうまそうだなと思った馬鹿がいた。最初の馬鹿はふぐを全部食べて『どうも皮がよくなかったらしい』と言って死んだ。それを聞いた次の馬鹿は、皮をはいでふぐを食べた。彼も『どうも骨が・・・』と言って死んだ。こうした、皆さんの馬鹿のおかげで、我々は安心してふぐちりか

食べられる。これこそが文化というものである。

このようにご先祖様のおかげをこうもって今日のある我々は、次の、また次の時代にも人間が幸せになるものを残さなきゃならん責任ってもんがあるんだ。」

今年の文化祭では地元東小の子どもたちの書道、絵画の作品を募集し表彰式を行いました。頑張った子どもたちのことを地域が認めてあげること。みんないい笑顔でした。来年度は何をしましょうか役員の皆さん。ふぐでも食べながら考えましょうよ。



求愛給餌とガッツポーズ

国母地区

関本 弘

朝四時に起床、三月は寒いので身仕度を整え撮影に出かける、五時に現場に着。川の泥やゴミの清掃をし、テントで三脚にカメラをセット、五時半カワセミが来るのを待つ。

ここからは心がわくわく、ドキドキ、甲府市の鳥カワセミです。すぐ来る時もある。一時間、二時間待っても来ない、そんな時は色々考えて、空想を思い巡らせる。天敵の猛禽類に食われたのか？ 何処か違う餌場へ行ったのか？ もっと条件の良い餌場があるのか？ 今まで来ていないメスを連れて来るのかもしれない！ そしたら今年初めての求愛給餌を目の前でやってくれるのかな？ と期待を膨らませたりする。

求愛給餌は鳥などによく見受けられる。つがいになる頃の儀式で、

オスからメスに餌の魚を与え受け取ってもらえると、一緒に巣穴掘りをしたり、互いに魚を捕ってきて子育てを行ったり等の、春先の光景です。メスに魚を受け取ってもらった時、オスが必ずするポーズ、背伸びして体を大きく見せ、あの鋭い嘴を空高く突き上げる動作、俺は大きくて強いんだ！

メスが受け入れてくれた！ と喜びを表す。まさに人間だったら拳を突き上げアピールする動作。鳥も人間も喜怒哀楽は同じなんです。

今後におきましても、文化活動に関わる一人一人の日頃の努力により、国母地区に、更に甲府市に文化の輪が盛んになることを祈ります。

詩吟に出会って

山城地区

薬袋 等

あと一年で八十歳を迎える。自分は今までに何をし

てきたのだろうかと思省しきりである。ただ定年後の趣味として「詩吟」を稽古してきたことだけは「当たり前」であつたと思つている。六十歳で定年を迎えて、以来、二十年も練習したのだから「物」になつたかという「否」である。

西洋音楽では音符で定められた歌い方があるが、詩吟にはそれが無いわけではないが、ある程度の自由さがあるということだ。詩吟にも「合吟」といって、三人・五人・七人・それ以上も。というように西洋音楽の合唱と同じようなものがある。譜面通りに同じように他の人と合わせる必要があるが、一人で吟（独吟）する場合はその必要はない。

この自由さは歳をとつてからの稽古には最適だ。時間や約束に縛られて、自由にならない組織世界から解放された定年後の趣味の世界は、生活を楽しく潤いのあるものにしていく。

吟を覚え、大声で発声することは身体や脳に良いと

もいわれている。

穴切地区文化協会

穴切地区

千野 勝人

穴切地区文化協会も、歴代の先輩たちのおかげで、四十年を迎えることができました。四十年の歩みの中で最大の試練ともなったのは、新型コロナウイルス感染症です。しかし部員のみなさんのおかげで今年度の文化祭も無事に終ることができました。地区の舞鶴小、西中学校の生徒たちの絵画、書道の作品を出品してもらい、会場を賑やかにしてくれました。

その子どもたちが大人になり文化協会の盛り上げてくれることを願っています。しかし、一つの悩みもあります。会員の減少です。会員をいかに増やしていくかという事です。だんだん会員も高齢化になってきますので若い人たちを入れていかなければなりません。そのため

には文化協会の内容を理解してもらわなければなりません。

今私たちが考えているのは、地区にある山梨県立大学の学生さんに、何か一つ部を作ってもらい、若いパワーをもらいたいということです。大学は普段から地域のことに熱心に参加をしてくれ、取り組んでいただいています。それが実現するよう会員一同これからもガンバッテ行きたいと思えます。

自治会あつての文化協会

玉諸地区

齊藤 憲生

昨年コロナ禍、第三十六回文化祭を終え、演技発表や作品展示は三割程度減りましたが成功裡に終わることができました。第三十七回文化祭は小学生や園児の出演も決まり、コロナ前の日常に向かうべく準備に鋭意取り組んできました。

私は鳥取県米子市で生ま

れ横浜市で育ち、会社員として北海道から九州まで転勤を重ね定年となり、父の故郷甲府市に住み始めました。その後、家族を亡くし、その淋しさから学生時代七年続けた合唱を再開したのが玉諸地区文化協会に

関わる切っ掛けとなりました。今では、ほとんどの市で自治会や町内会に加入し、甲府市に来て五年目の平成二十六～二十七年自治会長をしてみて文化祭、体育祭、防災訓練など沢山のイベントを経験しました。玉諸地区は各種団体組織と自治会連合が共にあることを実感しました。それは甲府市に住み始める以前の町内会は夏か秋の祭りだけが会員参加の行事だったからです。

ところで、令和五年四月九日朝日新聞第一面に掲載された、全国の自治会の解散が増えているとの記事を読んで愕然とした現実もあり、東京都だけでも自治会の増減が百四十四の減とのことにも驚かされました。

結びになります、玉諸

地区文化協会としての「文化祭」が発表や展示の場所を提供するだけでなく、専門部の紹介や新たなサークルの立ち上げ、勧誘や掘り起こしを更に行っていく良い機会になることを期待しています。



これからの文化祭について

新紺屋地区

勝村 武

新紺屋地区第三十七回文化祭も無事終えることができました。世の中が刻々と変化して行く中、機関誌「文協甲府」を書かせていただきました。甲府市文化協会の皆様の活動により、また、事務局の協力により「文協甲府」第四十五号が発行されること、楽しみにしていきます。

新紺屋地区は住むには良いところですが、少子高齢化のため、後継者が少ないのです。その中で会員の皆様方のご協力のおかげで文化祭ができました。

「子どもから大人まで」。この地区に住む方々のご参加とご協力をお願いします。先人、先輩たちが築いてきた文化祭。新紺屋小学校の子どもたちも元気な声で合唱して参加してくれました。茶道部、詩吟部、民舞部、太鼓部、絵画部、造形部、短歌部、写真部、囲碁将棋部、川柳部、盆栽部。



地区文化祭を振り返って

朝日地区

伴 賢二

地区文化祭は、十一月十一日(土)・十二日(日)の両日、朝日小学校体育館、朝日悠遊館で行われました。十一日の開会式には椅子席が満席となり、発表部門冒頭の甲府工業高校応援団の発表では、立ち見が出るほどでした。若者の気迫あふれる「援舞」に観客は度肝を抜かれ、絶大な拍手が寄せられました。午後一番の、駿台甲府中学校吹奏楽部の発表では、手拍子の中、アンコールにも応えてもらいました。トリは横沢いきいきサロンの寸劇「瞼の母」で、総踊りで締めくくりました。「瞼の母」は、十二月三日が本番です。午前十時から午後四時まで休みなしの通しで二十二種目の出演があり、スコップ三味線、寸劇「寅さんの同窓会」、ハーモニカ演奏、津軽三味線、詩吟、三味線、踊り、民謡など実に多彩な発表会となりました。

た。

展示部門では、絵画、写真、文学、書道、絵手紙、手工芸の各部門に例年にもまして多くの出品があり、展示スペースの確保に苦勞するほどでしたが実にハイレベルな作品展示でした。いきいきサロンの展示も、五自治会から出展がありました。「文協ふれあいの旅」コーナーには、写真、俳句、短歌、川柳など二十四人から作品が寄せられました。朝日悠遊館で行われた囲碁大会は、十三名の参加で三組に分かれ優勝を争いましたが、最高齢は百歳の方でした。全体として大変充実した文化祭となりました。

スクエアダンスクラブ・ダンスパーティー

富士川地区

立川 茂

ようやくコロナ禍が終わり、文化祭が開催できる。例年より遅れたが十一月二十五日、二十六日に実施。

コロナ後の社会の変化に対応し、新しい文化祭のあり方を模索したが、そもそも地区の皆さんの活動の低下が著しい。

文化祭開催を伝えても、この数年間の休眠状態を訴えられることが多かった。今回の文化祭は活動の成果の発表の場というより、むしろ活動再開を促す契機となるような次第だ。

そんな中、当協会傘下の富士川スクエアダンスクラブがダンスパーティーを実施した。

当該クラブも参加者が減り単独では活動できない状態だが、同様の他のクラブと合同で毎週例会を行っている。その合同アニバーサリーだった。

県内外の愛好者に声をかけ、総勢百五十名が富士川悠遊館に集まった。抽選して参加者中三十五名に、ドア・プライズと称してシャイン・マスカットを渡し、それも好評だったと聞いている。



賑やかに地区文化祭

相生地区

雨宮 秀

令和五年の相生地区文化祭は、「光り輝け相生の文化」のスローガンの下、令和五年十月一日午前九時三十分から、旧相生小学校体育館において開催された。

来賓には、相生地区自治会連合会会長、甲府市地域保健課保健師をお迎えして実施。

また、途中、甲府市長がお忙しい中、激励に駆けつけてくれた。

「展示の部」では、写真部、絵画部、書道部、盆栽部のほか、卵殻モザイクなどの

会員の日頃の研鑽が見事に結晶した作品が展示された。さらには、地区内福祉施設から入居者の作品も出展され会場を彩った。

「発表の部」では、舞踊部、レクリエーションダンス部、洋舞部（フラダンス）、ハーモニカ部、歌謡部（カラオケ）などの発表が行われ、楽しいひと時となった。

しかし、毎年のことながら観客が少なくて、せっかくの展示・発表も何かもったいないような気持であった。

文化祭開催の宣伝は、ポスターとチラシのみだが、他に何か良い方法がないか、今後の、要検討課題である。

文化の伝道師に乾杯

池田地区

永友 淳夫

文化活動は奥が深く、芸術だけでなく、科学やスポーツ、また地域活動も優れた文化価値があると知った。私の好きな将棋界の大御所「加藤一二三」さんの言葉に胸を打

たれたのは、将棋界にすい星のごとく現れ、衆目の誰もが認める天才少年の二冠達成時に、彼に期待するとして、「この先、人工頭脳の研究がいかに隆盛を誇ろうとも、藤井聡太二冠には、人間の探求心と求道心の先にある芸術的な一手により、盤上での感動を追求し、将棋界を沸かせていただけることを願う」と語ったこと。AIより人の心ということか、叱咤激励なのか。少年はその後全八冠を制覇。無冠となり引退した、かつての天才の言葉の含蓄の深さを感じた。更に「人生を楽しむのに定年はない」とも語っている。凜として揺るがないあの方の文化なのだろう。



仲間と令和五年度文化祭の作品「ピンメリー」作り

春日地区文化祭を終えて

春日地区

清水 明

春日地区でも昨年、第三十八回の文化祭がほぼコロナ前の規模で開催されました。

他の地区同様、出品者・

出演者の半数以上が高齢者で占められました。もう歳だからと言って退会される方が多い中、率先して会に入り、仲間に溶け込む高齢者も多々います。その様な方は心身共に非常にお元気で目を見張るばかり。

文化活動の中には体力・視力等、身体能力を求めるものも多いですが、肝心なのは、気力・やる気があることだと思います。自分に合ったものに取り組み、仲間づくりをし、楽しくその時を過ごすことではないでしょうか。もう歳だからではなく、歳だからこそ一日一日を大切にしてください、楽しい時を過ごそうではありませんか。

一人引きこもってしまう

のは非常に損なことだと思います。是非、文化の輪に入っていたいだきたいと思えます。

今後の地区文化祭

羽黒地区

山下 知

昨年に引き続き今年も甲府市北公民館に会場のご提供をいただいで、第三十二回の文化祭を開催いたしました。

昨年からはじめた新しい形態の経験と反省を踏まえて、会場の配置やプログラムも改善し、前回よりかなりスムーズに進めることができましたと感じています。また、昨年は実施できなかった開会式も開催し、来賓として甲府市長はじめ地元出身の議員の方々や地元の小中学校校長・教頭先生にご出席いただいで、お祝いと激励の御言葉をいただくことができました。

各専門部の皆様の日頃の活動の成果発表は一段と熱が入り、地元の文化を継承

し楽しみながら伝えて行くという意気が感じられました。

ただ少し残念だったことは、文化協会会員でない一般の人々の参加が少なかったことで、来年からの地元の方々への周知徹底方法を見直す必要を感じました。

更に地域活動の全体的な問題ではありますが、主催者および関係者の高齢化が頭の痛いところではありません。

近々関係者が集まって反省会を開いて、来年へ向けての意見交換を行う予定です。また、各地区文化協会の責任者が集まって意見交換をする機会が持てれば良いかと思えます。

千塚地区文化協会の会長からは貴重なご示唆をいただいで感謝しております。今後とも皆様宜しくご指導のほどお願い申し上げます。

「秋あかねも 少し少なくなりぬ」

気張らず楽しく

継続は力なり!

甲運地区

内田 収子

大正琴の美しく懐かしい音色に魅せられ、習い始めてから今年で五年が経ちます。この月日の間にはコロナ

禍等の大変な時期もありましたが、月に二度の練習には参加を続け、町内の行事である敬老の日の茶話会、文化祭への参加で日頃の練習の成果を発表することができました。

また、琴だけではなく、九月には先生がドライブに連れて行ってくださり、何十年ぶりの白糸の滝、富士の宮の浅間神社では、皆一心に願い事をしてきました。美味しいお寿司を食べ、大変楽しい一日を過ごさせていただきました。

「気張らず楽しく、継続は力なり」をモットーに、これからも大正琴を続けていきたいと思えます。そして、甲府市の文化発展のためにも、少しでもお役に立てればと

願って、今後も精進してまいりたいと思っています。

第三十回大國地区文化祭が終了して

大國地区

樋川 美智子

コロナ禍のため二年間のブランクがありました。第三十回大國地区文化祭をようやく開催することができました。

コロナ禍と高齢化で以前に比べて、活動の低迷もあり、全体的に参加者が減少しています。

私は地区文協の役を受け、初めて文化祭の準備に携わりました。何回も打ち合わせがあり、プログラムの作成、招待状の発送、その他役割を決め、手落ちのないよう何度も確認し、大変さが身に染みました。

私は舞踊部に所属してから十五年以上になりますが、今年は私たちだけになってしまい寂しく思います。発表の部は過去一番少ない出

席者でした。

大國小学校の三年生六名の「私の地域・歴史探訪」で、地域の歴史文化について学習したことを報告発表してくれました。

発表の部は、ハーモニカ・舞踊・カラオケ・朗読等は、今まで通りで、演奏ピアノの弾き語りに初めて参加していただき、会場を盛り上げてくれました。

展示の部は、書道・絵画・写真・手芸・切り絵・ものづくりの会です。

まだまだ地域で発表できるような趣味の持ち主が沢山いるのではないかと思います。練習の成果を喜んでもらえるよう、多くの方々に観ていただけるよう、みんなで声掛け合って、部員を増やして楽しい文化祭が開催できることを願っています。

創立三十周年 記念文化祭

北新地区

桂田 晶子

令和五年十月八日、会場

は北新小学校の体育館。北公民館から借用したパネル・机の運搬は、地区自治会連合会が大活躍。今年は北新区文化協会創立三十周年を記念して北新小校歌「この丘に」の誕生物語の朗読をオー

いの夢」の後、落語の名作「芝浜」を朗読で上手にまとめ、文化祭は終わりました。



現在をどう乗り切るか

新田地区

刃刀 幸雄

人生をどう生きるかを考えるとき、現在はどういう時代なのかを熟知しなければなりません。人が生きるということとは川の流れに沿って一艘のボートをオールドでこいでいくようなもので、進行方向は背中側のため、未来は全然見えません。見えてくるものは過ぎ行く過去ばかりで、過去の過ち失敗等々から学び成長していくしかありません。

現在は過剰な情報が多いため、人々は混乱を起し、真の自己を見失いがちな時代と言ってもいいでしょう。コロナ禍で世界が未曾有の災禍となっていました。新田文協も発足当時は十八部門でしたが、現在は五部門になってしまいました。

三年に創立五十周年を迎えた。四十周年にない記念事業を計画していたが二つの問題に直面した。

一つは世界的なコロナ禍で三密による活動の制約。二つ目は高齢化に伴う会員数の減少による財源と動員数の縮小であった。

一つ目は防疫に心がけ、活動内容の工夫と地道な努力によって何とか維持できたが、発表の場がないことは大きな痛手となった。二つ目は、令和五年コロナが終息に向かい、可能性を模索した結果、経費のかかる記念式典は行わず、記念事業を経費を節約した分割行事として行う方針を立て実施することにした。



創立五十周年を祝う

中道地区

松野 賀興

中道地区文化協会は令和

この三月には功労者表彰と各部の発表で敬意と感謝を表し、八月と九月には地元出身の講師をお招きし記念講演会を開催し、戦中戦後の地元の様子や生活を回顧し平和について考え、また、地区内の埋もれた城跡の歴史から中道の魅力を再認識することができ、共に

大好評であった。

十月、中道地区文化健康ふれあい祭り・文協文化祭も盛會裡に終え、現在、会誌「かしお路」四十二号に、記念事業を特集としてまとめる取り組みをしている。刊行等物価高騰の折、「甲府市文化協会モデル活動事業助成金」を申請したところ、交付していただき感謝申し上げます。

五十周年の

大里地区文化祭

大里地区

河 込 さか江

大里地区文化祭は、今回で五十周年をむかえました。会場となった大里悠遊館の玄関ホールでは、華道部全員の、松を主体に古木と花が調和した、見事な活け込みがお客様をお迎えしました。

開会式では、甲府市文化協会会長の樋口雄一甲府市長はじめ、大里地区自治会連合会会長、地区選出の県議・市議の方々のご祝辞を

いただき開催しました。

発表の部門では、優しい音色の「オカリナ部」から始まり、ゆっくりとした動作の中にも力強さを感じる「太極拳」、可愛らしいコスチュームの「スクエアダンス」、「大正琴」では、演奏に合わせ来場者も一緒に歌い、「朗読部」の発表に耳を傾け、最後はあでやかな「フラダンス部」に魅了されました。

会場内には、諸々の大会で大勢の受賞者を輩出した「俳句部」や「短歌部」、郷愁を感じる風景や撮影方法を知りたくなる「写真部」、来年の干支などの押し絵を作成した「いきいき趣味の会」、細やかな編み目の手編みのセーターやベスト、手をかけて作られたクラフト手芸の「編み物部」などの展示で、会場に彩りを添えていただき、どの部もパワー全開でした。

多くの皆様にお越しいただき、楽しんでいただき、主催者も来場者も一体となり、楽しめた温かい文化祭となりました。

これからも、地域のふれあいの場「大里地区文化祭」を次世代に引き継いでいきたいと、なお一層心に強く感じた一日でした。

俳句部の歩み

石田地区

佐久間 孝 男

石田地区文化協会俳句部が創部されたのは平成十四年九月のことです。

初句会には四十人あまりの人が集まり、盛大に句会が始まりました。最初は季語など分からず、私も一年は苦労しました。バス旅行で埼玉の巾着田へ吟行に行ったこともあります。曼珠沙華が素晴らしいところ。旅行の反省会を兼ねて、忘年会も開催し、和気あいあいと楽しいひとときとなりました。

石田地区文化祭には今年で十九回目の参加となりますが、残念なことは会員の高齢化のため、七年前から甲府市の文化祭に出展できなく

なってしまったことです。

俳句部も二十年経つと、皆高齢者になり鬼籍に入られた方、高齢で辞める人など、今や五人となってしまいました。さらに最近ではコロナウィルス感染予防のため、顔を合わせての句会を開催することもできないため、おののが詠んだ句を会長宅に送り、手を入れた句を山梨日日新聞に投稿する活動を続けているところ。です。

華道部の現状

伊勢・住吉地区

五味 芳子

伊勢地区の華道部は、今は八名で月二回、先生のご指導をいただいで楽しんでおります。

先生は、太田町の秋山生花店のご主人です。以前は、お父様であり、日本古流華道・松源斎秋山一州先生に、生花・盛花を教えていただきました。一州先生の時代は悠遊館などという公共施設はありませんので、伊勢

消防分団の二階で夜お稽古をいたしました。

今の若先生には月一回、一回目は盛花、二回目はアレンジと、今の時代に合った生け込みを教えてくださいたいです。四季折々の花を家の中に生けてあるだけで心が穏やかになり、花の香りで癒されます。

一州先生の時代は、華道部は入部するの人も多く、すぐには入ることができませんでした。今では伊勢・住吉地区は高齢化が進み、人口も少なく空き家も多く、本当にさみしくなりましたが、少しでも先輩たちが作ってくださった部を消滅しないよう頑張りたいと思います。



令和五年

第四十九回甲府市民文化祭

テーマ 培った 文化の光 輝け未来に

開催期間

令和五年十一月三日(金・祝)

十一月二十三日(木・祝)

発表十一部門

演劇三十人、

合唱三三一人、

合奏二七〇人、

吟剣詩舞道七十七人、

茶道八十五人、

能楽十人、

舞踊二二〇人、

邦楽一六二人、

民謡三十一人、

洋舞六十人、

高校生の部三二〇人



展示九部門

華道四十三点、

工芸五十九点、

写真二十二点、

書道三十九点、

水石二十点、

美術七十一點、

文学一六七点、

盆栽十八点、

青少年作品一三六點

開幕式

令和五年十一月三日(金・祝)

午前十時

歴史探訪コーナーを設け、

小冊子「私の地域・歴史探訪」

(甲府市内三十一地区)の

展示及びビデオ上映を行

いました。

展示点(人)数 六七三

出演者数 一、三九六

来場者数 延べ五、四三二

特別出品

銘

「富士川産

茅舎石」
くずやいし

甲府市文化協会

会長 樋口 雄一



山里の茅で葺いた、崩れかけた古民家の屋根を連想させる
形姿の石です。

銘

「泰然」

顧問 宮島 雅展



「泰」は、ゆっくり落ち着いて
いる、やすらかな様子を言い表し
ており、「然」は、ありのままと
いう意味です。

銘

「生花・三歳活」

顧問 鶴田 一杏



華道六百年の歴史の
基本花型・天地人

第49回甲府市民文化祭 文化祭賞・奨励賞

工芸部門

奨励賞

「ブルーファンタジー」
(トールペイント)

酒井 久美子
(貢川)



(推薦理由) 青を基調にして落ち着いた色調の中で、深みと奥行きを表現しています。

奨励賞

りゅう ゆめ
「龍の夢」 (陶芸)

中西 光 茂
(小瀬町)



(推薦理由) 龍と蓮の花を生き生きと表現しています。釉薬の効果で立体感が良く出ています。

文化祭賞

はなまい
「～花舞～」
(フラワーデザイン)

長田 早 苗
(上石田)



(推薦理由) フラワーデザインでは難しい技法に挑戦しており、完成度が高い作品となっています。

奨励賞

はなこぶあくじょう
「鼻瘤悪尉」 (能面)

山 口 徹
(中央)



(推薦理由) 彫刻と彩色がしっかりしており、鼻瘤悪尉をよく表しています。

写真部門

奨励賞

ふゆば かいこま
「冬晴れの甲斐駒」

今井 淳美

(相生)



(推薦理由) よく晴れた初雪の朝、遠くバックに甲斐駒を据え、前景左に水車小屋、中景にワラ小屋と、申し分ない構図に収めた完成された作品で、作者の力量を感じます。

文化祭賞

「とんぼのメガネ」

渡辺 綾子

(飯田)



(推薦理由) 一目見てピントがシャープで素晴らしいです。トンボの顔と翅が、丁度ピントの深度に入っていて、この写真はピントが第一で、そしてシャッターチャンス光線もソフトで、良い条件が揃った傑作です。

奨励賞

さんちょう よあ
「山頂の夜明け」

小林 忠

(国母)



(推薦理由) 富士山を見通す絶景の場所、手前の青い岩肌と、向こう側の緑の面が夜明けで、渋い色合いで画面を引き立てていて、虹色の空と一体で、強い作品になっています。

奨励賞

にじいろ はたけ
「虹色の畑」

米山 佳織

(城東)



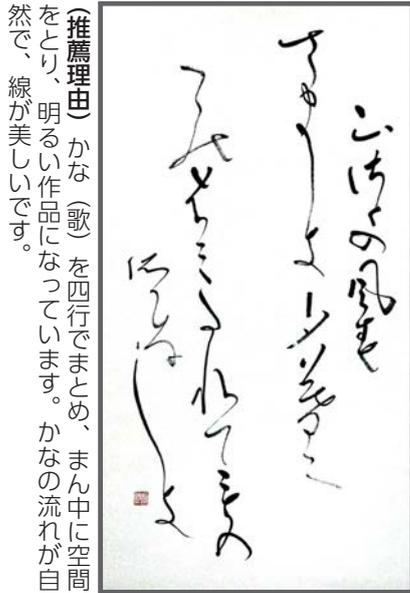
(推薦理由) 斜面に植えられた花畑、見事で色あっても題名どおり華やかな感じで、観覧車と賑やかに人がいて、この被写体がこの画のポイントで、この画面が生きています。一番いい角度で狙っていて良作です。

書道部門

奨励賞

しんこきんわかしゅう
 「新古今和歌集」
 やまざと かぜ ゆふ
 山里の風すさまじき夕ぐれに
 この葉みだれてものぞかなしき」

沼田 ひで子 (伊勢)

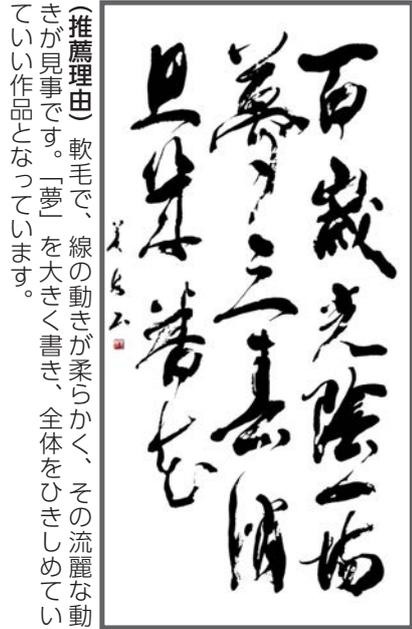


(推薦理由) かな(歌)を四行でまとめ、まん中に空間をとり、明るい作品になっています。かなの流れが自然で、線が美しいです。

文化祭賞

ひやくさいのこういんいちじょうのゆめ
 「百歳光陰一場夢」
 さんしゅんのしょうそくいくばんのはな
 三春消息幾番花」

星野美泉 (上阿原)

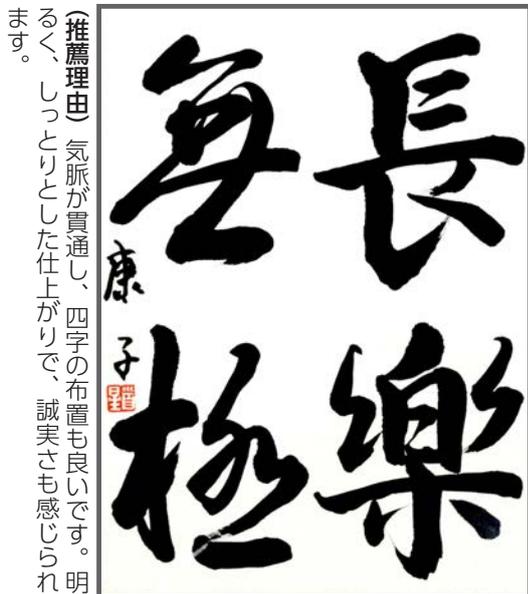


(推薦理由) 軟毛で、線の動きが柔らかく、その流麗な動きが見事です。「夢」を大きく書き、全体をひきしめていい作品となっています。

奨励賞

ちょうらくきわまりなし
 「長楽無極」

小松康子 (里吉)



(推薦理由) 気脈が貫通し、四字の布置も良いです。明るく、しっかりとした仕上がりで、誠実さも感じられます。

奨励賞

はく ぼ
 「薄暮」

山田蒼岳 (大里)



(推薦理由) 濃墨、柔毫を使い、張り切った線で表現されています。穏やかな中にも、強さを感じさせた作です。将来が期待されます。

美術部門

奨励賞

ねこ はな
「猫と花」 (日本画)

中島百子
(富士見)

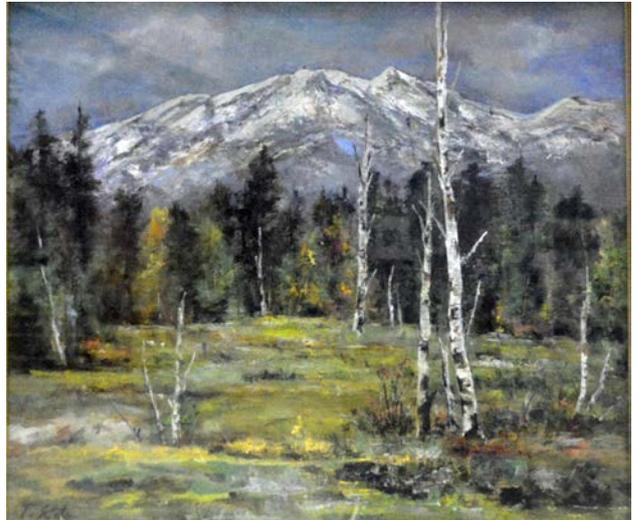


(推薦理由) 画面に三分の二をしめる花・花・花。花いっぱいの中から、猫がちょこんと顔を出しています。花の描写・猫の描写などが秀でた、迫力ある画面にしています。

文化祭賞

のりくらくらこうげん しらかば
「乗鞍高原の白樺」 (油彩画)

加藤智計 (伊勢)



(推薦理由) 全体の色調が淡く、深味がある色彩で表現されていて目をひく作品です。横にのびていく山、野原を切るように白樺の木が垂直にのびています。近くの白樺の木から、奥に行くに従って細くなる白樺の木が遠近感を出し、色調・構図など決まっており、文化祭賞に値する作品です。

奨励賞

こも び
「木漏れ日」 (水彩画)

望月静子
(池田)

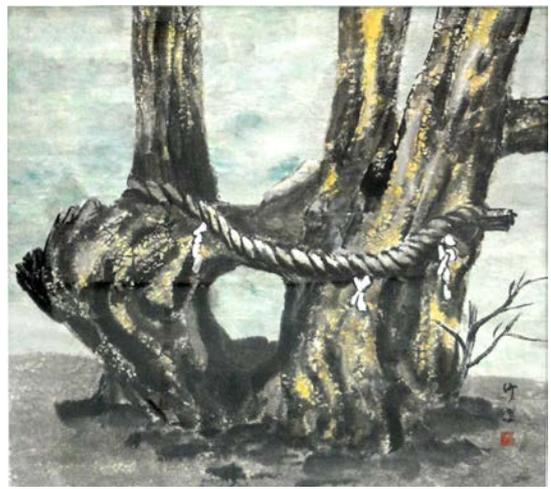


(推薦理由) 一点透視図法の構図で描かれ、奥行きのある素晴らしい作品です。特に、木漏れ日が実にうまく表現されていて、こんな道を歩いて行きたいと思うほどです。樹木に、緑色を着彩しているなど、こまかな工夫がされています。

奨励賞

いちょうのき
「いちょうの樹」 (墨彩画)

平尾町子
(小松町)



(推薦理由) 古木のいちょうの樹を画面いっぱいに描いています。しめ縄がかけられているので御神木でしょう。古木の表現を、墨の濃淡と筆のタッチで表しています。構図も良く、迫力ある素晴らしい作品になっています。

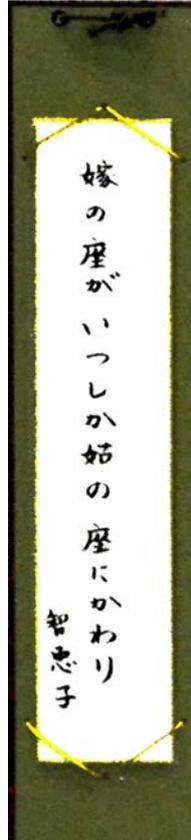
文化祭賞

高野 智恵子 (富竹)



(川柳)

「嫁の座がいつしか姑の座にかわり」



(推薦理由) 嫁いで長い間、家風に染まった嫁の座から、やがて姑になり色々なドラマを紡いで、頑張ってきたことでしょう。家の歴史を支えてきた作者の、心からの安堵感が充分読み取れ心温まる句に、素直に惹かれました。女の心境を上手にまとめて、見事こしと言いがありません。

奨励賞

佐野 越子 (城東)

(川柳) 「生きざまを思い巡らす一人風呂」



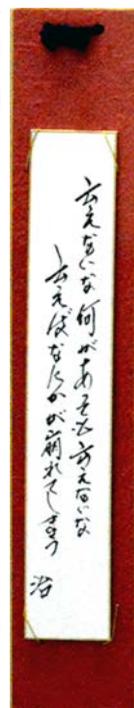
(推薦理由) 九十七歳にして元氣潑刺に生き、川柳界で一番の長老が、これは見事と思う一句を詠みました。長い人生の回想をゆっくり湯に漬かりながら、一人思いにふける様子が手に取るように浮かびます。これからも、元氣で川柳に励む仲間を温かく見守ってください。

奨励賞

渡辺 治 (右左口)

(短歌) 「言えないな何があっても言えないな」

言えばなにかが崩れてしまう



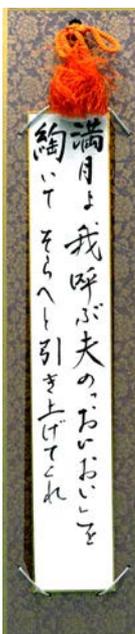
(推薦理由) □外したら大変なことになる、そんな思いを抱えて逡巡する様子が詠まれています。言うという動詞を三回用い、「言えないな」を繰り返して用いて、そこが歌のリズムを生み出していると思います。

奨励賞

興石 恵美子 (大里)

(短歌) 「満月よ我呼ぶ夫の「おいおい」を」

縋いて天へと引き上げてくれ



(推薦理由) 夫は私(妻)のことを「おい」と呼び、時には「おいおい」と呼ぶのが習慣になっているようです。私は「おい」ではなく、ちゃんと名前があるのよ、と不機嫌になっています。「縋いて天へと引き上げてくれ」と、満月に呼びかけているところがおもしろいと思います。

奨励賞

戸澤 茂紀 (朝日)

(俳句) 「枯木卸へ容赦なき八ヶ岳の風」



(推薦理由) 枯木卸とは、枯れた枝を薪にするために切り落とす作業のことです。思わず寒々しくなってしまう句ですが、八ヶ岳から吹き下ろす、有無を言わせぬ風を全身に浴びながら、黙々と作業に取り組んでいる姿が、ありありと目に浮かびます。冬を迎える人々の生活の「こまを」、鮮明に切り取っています。

水石部門

奨励賞

かまなしがわ たきいし
「釜無川 滝石」

守屋とく子
(国母)



(推薦理由) 主峰のバランスが良く、小品ながら堂々たる滝で、水煙飛瀑の景です。水盤・卓との取り合わせも絶妙です。

文化祭賞

かまなしがわ たきいし
「釜無川 滝石」

宍戸忠三
(上石田)



(推薦理由) 釜無川は、滝石の産地として日本一とされています。最近では、なかなか産出されなくなりました。本石は、小品ですが主峰・副峰のバランスが良く、谷も深く女性的美しさのある秀石です。こよなく愛せる石となるでしょう。

盆栽部門

奨励賞

ちちぶにしき
「秩父錦」 (春蘭)

田中真司
(美咲)



(推薦理由) 秩父錦の葉面の斑柄は、途々に暗みを増して行きます。しかし、本作品は二年目以降の葉にも一部葉柄を残しており、栽培技術の高さをうかがわせませす。また、葉幅を引き雄大感も充分に表しています。

文化祭賞

りょうま
「竜馬」 (春蘭)

高井数夫
(城東)



(推薦理由) 竜馬は濃い緑覆輪の中すけ縞で、かたい地な縞になりがちですが、本芸は刷毛込みの深い止葉大葉性の、中立の葉肉のある広葉で、美麗なのが一番なので推薦しました。

展示・発表の部

第四十九回

甲府市民文化祭を終えて

華道部門 小林 明 美

今年度はコロナ禍での規制が緩和され、以前のような文化祭を！を目標に、準備を進めてまいりました。二日前の業者による設営作業時には、華道部の役員も立ち合い、背面パネルの数、机や台の長さ等の確認を行い、背面のシートは業者の協力のもと、きれいに貼っていただきました。前日午前は、腰布を貼る作業を手際よく行い、午後からいけ込みに入りました。展示方法については、幹事会で相談を重ね、地区は一作品一メートル三十五センチメートル（六地区十三名出瓶）、専門部は一流派四メートル四十センチメートル（十流派）とそれぞれともゆったりとした空間をとることで、より見応えのある作品を生けることができました。秋の豊かな花材をふんだんに使い、紅葉あり、実物ありと、素晴らしい作品が並び、来場者の方々

も、写真を撮ったり、珍しい花に足をとめ花材名を確認したりと、花の空間を楽しんでくださっていました。ご協力いただきましたみなさま、本当にありがとうございました。



感謝とともに

工芸部門 長 田 早 苗

周りの木々が色づき始めた文化の日、秋晴れの中、第四十九回甲府市民文化祭が数年ぶりに制約もなく開催となり、作者の思いがこもり準備された作品を多くの方々にご覧いただく晴れの日となりました。毎年ながらですが、展示部門の搬入が一段落し、飾られた工芸・他団体の素晴らしい作品一点一点を細かい所まで拝見し感動いたしました。

私事ですが、四季の花たちを愛で表現する：フラワーデザインに魅せられ、その歩みも長くなりました。アレンジメントや造形の様々なセオリーを学びながら：師からは時に叱咤激励され先輩方と共にレッスンを受けております。今回、図らずも私の作品が工芸部文化祭賞をいただき身に余る光栄と感謝いたし、一歩ずつでも新しいテーマに挑戦し研鑽を重ねたい：と思いを新たにしております。第五十回市民文化祭に向け、花の魅力溢れる作品が創れます様にと努力して参りたいと思っております。



文化祭を思う

写真部門 広瀬 修

今回も女性が活躍して、上位入賞、写真も女性らしい写真ですが、技量がこもっています。写真を好きでやっている人たちは、みな同じだと思いますが、他の人の撮った作品をじっくり眺める経験の蓄積が、かならず自分の撮りたい方向が見え、こうしたサイクルをだんだん積み重ねると写真の面白さが滲みでてきて、写真の楽しさが一層でてきます。私は審査ではいろいろ見せていただき良い勉強をしています。

文化祭では、各催し場をまわり、民謡では、いろいろの合奏の中三味線の演奏の中で津軽メロディーはお腹に響くように、ぴりっとした演奏で良かったです。邦楽では、大正琴の演奏の天城越えは面白く楽しく、あとの演奏では、小学六年生、中三、高三の若い人たちの入った演奏にしばし聞き入りました。

文化祭も各部がんばったのあつというまの三日間でしたが、写真部共、各部の若者の参加が多くなるよう願っています。



恵まれた書の時間

書道部門 星野美泉

この度は文化祭賞という栄誉ある賞を頂戴し、大変光栄に存じます。選考委員の先生方、日頃ご指導頂いております先生方、先輩方には深く感謝申し上げます。

今回の文化祭の題材を決めるにあたり、中学生の娘へ向けてこの漢詩を選びました。学生生活はあつという間に過ぎ去ってしまいきますので、今、岐路に立っている娘に、自分を信じ「夢」に向かって羽ばたいてほしいと願いを込めました。まず草稿を作成し書いてみました。が、ああじゃない・・・こうじゃない・・・と試行錯誤していました。先生からアドバイスを頂き一気に書き上げたのが今回の作品です。そんな思いの詰まった作品を認めてくださり、大変うれしく思っております。

私にとって、日々の忙しさの中で心を落ちつかせ書と向き合う時間はかけがえのないものです。そして仲間と一緒に書を学び研鑽を重ねる時間を共に過ごすことがありがたく誇りに思います。そんな恵まれた環境に感謝しつつ、日々精進して参ります。



第四十九回

甲府市民文化祭

水石部門 望月竹彦

本年の文化祭は、コロナ感染予防対策以前の出品点数に対して、三分の一の減少となりました。

その原因は、高齢化であり特に地区文化協会の会員減少が目立っています。

水石部の展示については、今回会場の変更「二階展示室・和室」より、「二階多目的室」があり、会場のレイアウト等について、会員及び事務局と協議しての会場整備の上での展示となりました。

展示内容については、初めての使用会場であり、やや小品もありましたが、一応充分な展示であったと思います。

一階に移動して期待したのは、二階より来客数の増加でしたが、三日間の全体の来客数は減少しており、その大きな原因は、同じ甲府市による「甲府大好きまつり」でありました。

どちらにも、多くの市民の参加と集客を目的とした事業（催物）であり、人口減少の一途にある現在、調整の必要は、と思われれます。

おわりに、来年度は第五十回の節目にあたり、新たな展示（特別コーナー等）も考え、より良い展示に心がけるよう会員一同努力してまいります。

甲府市民文化祭に

参加させていただいて

美術部門 時田春代

美術の部で日本画を出品いたしました。私共の日本画のグループは会員の減少により、慣れない者が多く、迷いや戸惑いもありましたが、皆様のご協力もありスムーズに展示することができました。

私が絵を描くことに興味を持ったのは、楽しい旅行をしながら絵の取材もできれば、訪れたところも描けて楽しいのではないかと思っていました。ところが、それだけではなく出品させていただける場があり、仲間とレベルの向上を競い合い、また、協力しながら作品の展示の場を作り上げる。こんな楽しみもありました。地域の文化のよさを次世代へ引き継ぐためには、無理せず継続できるように意識して、努力していきたいと思えます。



甲府市民文化祭の運営にかかわって

文学部門 河野 一郎

今年度、初めて文学部門の運営にかかわりました。右も左も分からない中、前任者の深澤弘様と相談役の渡辺優様からの温かいご指導・ご支援をいただきながら取り組み、無事に終えることができました。

会員の皆様から頂いたどの作品も、作者の気持ちかストリートに反映されていて、その人しか表現できない個性のあふれた作品ばかりでした。詩、短歌、俳句、川柳とそれぞれの文学作品の特徴を確かにとらえ、それぞれの表現の形式を最大限に生かしながら自分の思いを込め、人の感情や心を揺り動かす作品として完成させていました。

気がかりなのは会員の皆様の高齢化です。そのために廃部とせざるを得ないこと、または活動しているが数年後には厳しい状況になることなどです。高齢化は如何ともしがたいことではありますが、皆さんで知恵を出し合い、若い人を取り込む努力が必要となるでしょう。文学の灯をともし続けるためにも、会員の皆様一人一人が今できることを着実にやっていき、未来を切り開いていきましょう。



第四十九回

甲府市民文化祭を終えて

盆栽部門 小泉 泉

「培った 文化の光 輝け 未来に」のスローガンの下、盛大に開催されました。前年度はコロナ禍で種々制限での開催、研修対策等の会合もできず、多難耐乏堅忍果決を余儀無くされました。今年五月、五類移行で制限が緩和され、会員の意欲も増し出品作も総て素晴らしい出来栄でした。今回から山の都アリーナでの展示移行で会員の緊張、引き締めもあり期間中無事平穩に終わり安心しました。

文化祭賞の高井数夫様、奨励賞の田中真司様、共に素晴らしい作品でした。おめでとうございます。

緑の濃い覆輪の縞の美しさ、葉柄栽培技術の高さを充分に表現しています。

盆栽部員一同、来年度に向け実践躬行更なる努力と研鑽を進め、良い作品づくりに専念してまいります。



二〇二三 文化祭

演劇部発表会から

演劇部門 わたなべまさゆき

皆様、お疲れさまでした。

今年の演劇部発表会は…さわやかな秋日和とは少しかけ離れた、むし暑い残暑の名残りの中での幕開けとなりました。

会場にお越しくださった皆様の暖かい拍手と声援の中で、演劇部発表会を、無事打ち上げることができましたことをあらためてお礼申し上げます。

今年は、例年の発表会とは違って、地域の中で演劇活動が続いている「劇団やまなみ」と「ハロー山梨演劇塾YayaYa」の皆さんが、オリジナル作品でご参加いただき、一味違う発表会のステージともなりました。

朗読とマジックと演劇の発表会…それぞれの個性に合わせた舞台作りを、これからはぜひ期待ください。



甲府市民文化祭を終えて

合唱部門 岡田 恭子

令和五年度の甲府市民文化祭合唱部門の発表は、十一月十八日(土)に総合市民会館芸術ホールにおいて開催されました。

五月八日に新型コロナウイルス感染症が五類に分類されてからは、換気と対人距離に気を付けながら、マスクの着用については、合唱団または個人の判断に委ねられました。文化祭でも、感染防止対策を行いつつ、多くの合唱団がマスク無しで精一杯の歌声を響かせました。

今年は、格技場を女性更衣室として使用して、衣装の着替えができるようにしました。色鮮やかなドレス姿での発表を聴くと、コロナ禍前の文化祭を思い出し、気持ちもより浮き立つのを感じました。

今年は何といっても、県外から講師をお迎えして発表できたことが一番の喜びでした。講師も一緒に音楽を楽しんでくださり、各団体にこれからの練習の励みになる温かい講評をいただくことができました。

五十回目の記念となる来年の文化祭に向けて、より一層精進しようと思いました。



文化の収穫祭

合奏部門 遠山 忍

今年も大過なく甲府市民文化祭が終わりました。

合奏部では、十七団体二七〇人が参加し、音楽のジャンルを超えて、それぞれが日頃の練習成果を披露しました。

何らかのきっかけで楽器と出会い、仲間を作り、サークル活動を通して、日常の中に「趣味」の居場所を見つけ、上達に向かって努力している参加者の姿は、誰もが輝いて見えます。

文化(culture)の語源をたどると、「耕すこと」とあります。更に「洗練させる」とか「教化する」という意味合いも含むようです。

生活の隙間に見つけた趣味は「種を蒔くこと」で文化の扉を叩き、「耕すこと」で、昇華へと導きます。

気心の合う仲間と切磋琢磨し、やり甲斐と心の潤いが育まれ、楽しさや充実感をもたらすとしたら、心身の健康増進にも一役買っていることになります。

文化祭とは、まさに耕し育てて得た果実を、収穫し披露し合う「収穫祭」と言えます。

客席の皆さんには、多彩な収穫

物を思う存分味わいながら、文化の香りを満喫していただけたことと思います。



いにしえを学ぶ

吟剣詩舞道部門

熊谷 学 耀

感染症の流行が当たり前の生活になりつつある中で、体調管理に留意し、無事文化祭に参加できたことは、大変うれしく良かったと思っています。

参加に当たって、よりスムーズな実施ができたのは、研修会を開き、部会・会派の刷り合わせでよく意見交換したこと、具体的には演目の進行表、申し合わせ事項等を作成して行ったことと思っています。

さて演目の主テーマ「構成吟」「一の谷の哀歌」は、源氏と平家との戦いであり、漢詩・和歌を通して吟詠・剣舞・詩舞による伝統文化を紹介できたことは、本当に良かったと思っています。

準備は順調とはいかず、特に「静の吟詠と『動』の剣舞・詩舞との間合い、強弱の調整は何回も繰り返し実施され、一体感を出すことに習練しました。

そして歴史の出来事が吟詠・剣舞・詩舞で表現されることで理解が深まります。歴史に関心ある方、試してみてください。



茶会は「二期一会」

茶道部門 新海 仙博

今年はず年に比べ、コロナ前のような形で茶席を設けることができました。大勢のお客様をお迎えして、甲府市民文化祭の茶会を開催し、大変有意義な一日を持つことができました。

茶会は、人と人との出会いの時間を大切に、一服のお茶を点てお客様に召し上がっていただき、「二期一会」の、その覚悟と心を読み取る場であります。

今回の茶会も、「二期一会」に想いを馳せ、茶の湯の醍醐味を味わっていただき、想い出深い一日となったことと思います。



四流派がそれぞれ趣向を凝らし、お客様をお迎えして楽しい一日を過ごすことができましたのではないのでしょうか。

また、来年も「二期一会」の茶会を楽しみに、日々精進して参りたいと願う一日でした。



能楽部門の紹介

能楽部門 土屋 祐美

今回は、三つの会が四つの謡曲を発表しました。

最初に、涌宝会が「羅生門」を謡いました。渡辺綱という武士が羅生門に出る鬼の腕を切り落とし、鬼が逃げていくという曲です。

二番目は、北謡会（男性）による「八嶋」でした。平家物語の八嶋を基にしていて、源義経の亡霊が登場します。

三番目は、北謡会（女性）が「善知鳥」を発表しました。地獄で善知鳥から責められている狛師の亡霊が、僧に助けを求めます。

最後に、長謡会が「隅田川」を謡いました。息子をさらわれて狂女となった母親が、息子を探し流浪します。息子の死を知った母親は、涙にむせびます。

お稽古は公民館等を利用していますが、甲府市民文化祭では立派な松を背景にした大きな舞台で発表することができます。このような空間で謡うことは貴重な機会です。日頃のお稽古にも身が入ります。来年の五十回に向け、お稽古を重ねていきたいと思えます。



一緒に楽しんで

舞踊部門 中川 花子

十一月十九日、舞踊部の発表会が開催されました。天気にも恵まれ、地区の文化協会の方々と共に総勢一二〇名の皆様と楽しい時間を過ごさせていただきました。

キリリとした男踊り、しなやかな女踊り。

皆様、姿勢が良く美しい舞い姿でした。それぞれの曲のふりを覚え、その曲の感情を表現する。とてもすばらしいです。

頭の体操もでき、体を動かして健康にも良いですね。

コロナも五類に移行しましたが、インフルエンザも流行しています。

健康に注意し、施設の慰問にもたびたび訪問させていただいております。

曲に合わせて手拍子を打ったり、知っている歌なら口ずさんだり、本当に喜ばれます。こうした舞踊部の活動に多くの人に参加していただきたいと思います。

一緒に楽しみましょう。



甲府市民文化祭に寄せて

邦楽部門 那 口 はつき

「皆さまこんにちは、初めまして」大正琴は、初めての寄稿とさせていただきます。

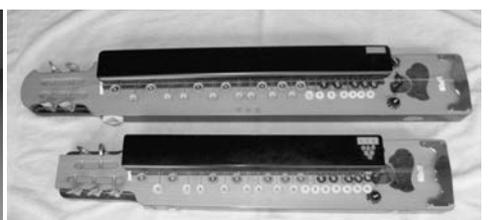
コロナが五類に移行したのに、今度はインフルエンザの大流行です。そんな中、十一月五日、文化協会松澤副会長のオープニングのご挨拶を頂いて、午前の部(大正琴)が開演しました。

大正琴は大正元年に日本で生まれた楽器です。今日は「あばれ太鼓」「ワインレッドの心」等ジャンルを問わず日頃の練習曲を、次々と発表することができました。

午後は邦楽の発表です。

お琴、三味線、尺八、長唄等の日本古来の音色につつまれました。遠い遠い昔のように心が落ち着く音色です。日本の伝統文化を継承しながら技術の向上を目指し、若い人にも興味を持ってもらえるように楽しみながら続けたいです。

「邦楽部の皆さん。来年を目指して、一步一步元気に進みましょう」



甲府市民文化祭を終えて

民謡部門 相川宝楽

菊薫る十一月十二日、私達民謡部の発表会が行われました。会員の皆様には、大変お疲れ様でした。今年の発表会は、随分お客様の数も少なく、反省しなければなりません。

原因を考えますと、今年はプログラムの数も非常に少なく、各団体に対して一部しかありませんでしたので、出演者にもプログラムは渡せませんでしたし、チラシも数が少なく、各会員に対して一枚ずつすらも渡せませんでした。

そこで私たち民謡部では、チラシを表紙にして、曲目プログラムをコピーし、各会員の皆さんに配布しました。それでもしないと出演者の出番も分からないからです。それにしても個人でのコピーでするので部数も限られています。それやこれやで市民の皆様には充分な告知ができなかったためだと考えています。

これ等の反省をふまえ、来年からのPRや宣伝活動の参考にしたいと考えています。



甲府市民文化祭

洋舞部門 松本瑞生

実行委員として携わらせていただいた、初めての甲府市民文化祭でした。例年は参加者として公演や講習会に関わっておりまして。このような貴重な場で、企画から携わらせていただきましたが、参加する立場から企画運営する立場となりますと、新たな視点での発見も多く、企画運営側の難しさも痛感しました。

今回の洋舞部では「リトミックワークショップと講演会」を実施しました。バレエもリトミックも音楽を媒体として身体を使って表現する、という大きな共通点があります。決められた振付を表現するバレエと、決められた振付がなく自由に表現するリトミックでは大きな違いもあります。リトミックワークショップでは、バレエを習う子どもたちが、音楽でリズムを取って自由に表現するということをとても楽しんでいて、改めて、音楽と身体表現の繋がりや楽しさを感じる事ができたのではないかと思います。

企画運営側も経験したことにより、更に、この甲府市民文化祭がより良いものに発展していくにはという視点で考えることができました。



今後の活動に活かしていきたいと思えます。

青少年作品展を終えて

青少年作品部門

末木良一

青少年育成甲府市民会議の地域環境部会では、「家庭の日」（毎月第一日曜日）と「青少年を育む日」（毎月第二日曜日）の啓発作品（作文、ポスター、標語、写真）を募集し、入賞作品を市民文化祭の青少年作品展で展示しております。本年は、十一月十一日・十二日に、総合市民会館展示室で開催しました。

本年も甲府市内の小学校、中学校、各地区から三、六四七点もの応募をいただき、一三〇点余りの作品を展示いたしました。

二日間で、入賞した皆さんとそのご家族を中心に四百五十人余りのご来場がありました。三世代でのご来場も多く、作品を前にして、一緒に写真を撮ったり、微笑んだり、頷いたり、展示室は温かい雰囲気にもなっていました。

皆様方のご支援とご協力に感謝を申し上げます。



高校生ってすごい！ 高校生部門を終えて

事務局

第四十九回市民文化祭は、甲府市の文化芸術活動の今後を見据えた、試みの文化祭でもありました。それが、次世代を担う高校生とのコラボレーション。

開幕式は甲斐清和高校の生徒さんと卒業生の素晴らしい歌で始まり、発表部門最終日は市内高校生が日頃の研鑽の成果を発揮しました。

発表参加者は総勢二二〇人。ダンス部門五校を皮切りに、合唱部門四校、続いて合奏部門五校、甲府工業高校の応援団と吹奏楽部の皆さんがフィナーレを飾りました。



その圧倒的な姿に感動し、全身全霊で身体表現、芸術表現する輝きをこれからも応援し、そして共に文化芸術活動を盛り上げていけたら：素晴らしいと思いませんか。



開幕式

令和五年十一月三日
山の都アリーナ入口にて

甲斐清和高校音楽部の卒業生と生徒さんの歌声で開幕



私の地域・歴史探訪

令和五年十一月二日～五日
山の都アリーナにて展示



表彰式

令和五年十一月二十八日
甲府市役所にて

文化講演会

甲府市文化協会では、会員はもとより市民の文化意識の高揚を図り、文化芸術への認識をより深め、今後の文化活動の一助としていただくため、毎年度、新年の初めに、文化講演会を実施しています。

本年度におきましても、甲府の歴史・伝統文化等を知ることにより、今後の甲府市文化協会の活動へ繋げることを目的に、文化講演会が開催されました。

開催日時

令和六年二月二十六日(金)
午後一時半から午後三時

会場

甲府市総合市民会館
芸術ホール

講師

高野孫左了門氏
株式会社吉字屋本店
代表取締役社長

演題

「最古にして最新たれ」
～地域社会と共に～

出席者

二二〇名



創業四五〇年をこえる吉字屋の歩みをたどりながら、地域社会との関わりを知り、これからの考える機会に…。



甲府市文化協会に

参加しませんか!!

本協会は、市民文化団体、各地区文化協会との連絡協調を保ち、自主的な文化活動を助長し、郷土文化の振興と甲府市の文化水準の向上を図ることを目的としています。

現在、十八専門部と、二十六地区文化協会が、学習と研鑽を積み重ね活発に活動しています。

地区文化協会は、市内の小学校地区に設立され、生活文化活動を通じて、住民相互の親睦と交流を図るとともに学校と連携・結びつきを深め、地域の活性化を図っています。

文化活動に関心のある方、これから学習したい方、一緒に活動しませんか。

お問い合わせ先
甲府市文化協会事務局
TEL 055(223)7329
メールアドレス info@kofu-bunkyo.com
ホームページ https://kofu-bunkyo.com

令和六年度 甲府市文化協会 行事カレンダー

☆甲府市民文化祭

令和六年十一月二日～二十三日(予定)

☆文化講演会 令和七年一月初末(予定)

令和五年度

甲府市文化協会 顧問・役員氏名

会長	樋口雄一	美術	古川みや子	国母	小坂フキ子
顧問	宮島雅展	文学	河野一郎	山城	藤田亮
顧問	鶴田一杏	盆裁	小泉泉	穴切	千野勝人
筆頭副会長(専門部)		演劇	渡辺政幸	新紺屋	戸澤清茂
吟剣詩舞道		合唱	岡田恭子	朝日	服田尚隆
副会長(専門部)	矢崎吼隆	合奏	遠山忍	富士川	立川茂
工芸	奥山幾代子	吟剣詩舞道	山縣清博	相生	雨宮秀
舞踊	中澤緑	茶道	石戸谷宗美	春日	清水明
文学	数野徳子	能楽	佐藤眞弓	羽黒	山下知
副会長(地区文協)		舞踊	保坂とみ子	北新	桂田晶子
甲運	下出祥司	邦楽	田村瞳声	大内	藤妙子
伊勢住吉	森田芳弘	民謡	相川宝楽	新田	功刀幸雄
千塚	小笠原正人	洋舞	深沢由美	中道	松野賀興
池田	松澤榮二				
副会長(生涯学習室)	林勝				
理事(専門部)		理事(地区文化協会)		監事	
華道	小林明美	大里	芹澤千束	専門部	笠井公巳
工芸	石川顕	石田	吉澤一家	地区文化協会	丸山文雄
写真	広瀬修	琢美	深澤芳次	教育総室長	岡部秀文
書道	矢崎美咲	千代田	末木幸造	事務局	
水道	水上強	相川	高田宣雄	事務局長	早川守
水石	水上強	東原	野五郎	事務員	大塚友美



文協甲府の寄稿には、相も変わらぬ高齢化による会員の減少を憂う記事が多く見られ、その改善策も思うにまかせぬ現状の折、昨年の第四十九回甲府市民文化祭は、甲斐清和高校音楽部の卒業生と生徒による、テノールとソプラノの響く開会式で華々しく幕が開き、参加した人々を魅了した素晴らしいひとときでした。

特筆すれば、文化祭期間中の十一月二十三日(木・祝)甲府市総合市民会館芸術ホールで開催された、甲府市内の高校によるダンス、合唱、吹奏楽等、次世代を担う若者達の一糸乱れぬ高度な技量にこころ打たれました。

まさに文化祭のテーマとして掲げた「培った文化の光 輝け未来に」を彷彿とさせた行事の一環でした。今後も高校生の活動を継続推進すべく、文協会員一丸となり若返りへの率先躬行、千思万考、創意工夫をモットーに、邁進する決意を新たにしました。

編集委員長 渡辺 優

〈表紙の写真説明〉

白壁の稻荷櫓、手前に「時の鐘」、黒塗りの蔵が並び、甲府城下を再現した甲州夢小路、その間を特急が走る甲府北口風景。

写真部長 広瀬 修

お手元へ配布された機関誌は大勢の方にご覧頂けるように、会員・友人・知人等へお配りください。

編集委員会

委員長	渡辺 優
副委員長	河野 一郎
委員	矢崎 吼隆
同	奥山 幾代子
同	森田 芳弘
同	小笠原 正人
同	広瀬 修
同	矢崎 美咲

(順不同)

TEL 055(223)7329
 FAX 055(235)5648
 メールアドレス
info@kofu-bunkyo.com
 ホームページ
<https://kofu-bunkyo.com>

令和六年二月一日発行